兼好法師あとおひ碁盤太平記

附たり師直がさよ衣今に一樣の黑羽織并に大勝四十七目のいし

近松門左衛門作

「物もふ。どなたぞ頼みましよ。頼みませふ。物もふ」もふと引聲も、長路次の裏座敷、牢人住居奥深し。折節嫡子の力彌は、碁盤引寄せ片手ざし、三ツ目がよりの大指ひしぎ腕先試して居たりしが、力「ヤイ岡平は居らぬか。物もふが有受取れ。岡平〳〵」と呼びければ、岡「どれい」と答へ出にける。竪「是は承及ぶ鹽冶殿牢人、初の名は八幡六郎、今は大星由良之介殿と申御方のお宿は是か」岡「中々由良之介借宅なり」と云ければ、竪「愚僧は關東の所化、用事有て昨日京著致せしが、鎌倉の町大鷲文五殿と申、是も鹽冶殿牢人なり、御狀一通ことづかり、急用なり大事の用慥に屆くれとの事。お屆け申」と出しける。岡「旦那は他行致され悍力彌宿にあり。申聞せん」と入らんとす。竪「ア、是々愚僧も本寺へ用有者、お目に掛るに及ばず」と、云ひ置てこそ出にけれ。岡平力彌に書狀を渡し、

長路次―長いにかけて長き廊の通路をいふ
片手ざし―碁盤を片手にさし上ぐ
岡平―寺坂吉右衛門
所化―僧
大鷲文吾―大高源五

口上述んとする所に、又「物もふ」と案内す。「何どれい」といらへ出ければ、「是さきに
し達物さ問ひ申べい。我とうは常陸からつん出た、順禮さでおんじやり申。鎌倉切通し
の邊で狀をことづかり申た。大星由良之介殿と云は、此屋臺にねまりめさるか。「何如何
にも是が由良之介旅宿。シテ何方よりの御狀」といへば、「是さお見やれ。狀は十四五
もおじやり申す。渡した人は小寺惣内竹森喜多八、片山源太と云へば先に合點だ。賴むと
有てことづかり申た。順禮が屆けたと返事にゆつて遣りなされ」と、いふて出れば、「是
旦那殿大星由良之介樣は是か。こちは相州の馬方、三條堀川迄早追の通しに來ました。
鎌倉の町原郷右衛門と云人から、狀ことづかつて草臥ながらほつこしふもない」と持て
くる。あと笈負たる高野ひじり、「我等此度東へ下り鎌倉の星月夜、堀井彌五郎殿と申御
方より、急用の御狀とて事託りし」と置いて行。お祓ひ配りの伊勢のお師六十六部の納
經者、關東廻しの商ひ便宜、思ひ〳〵の便について、案内合圖の忍びの狀數四十余通、
九月五日の一時に到來するこそ不思議なれ。岡平一ツに引抱へ、力彌の前に手を突いて、
「一度〳〵に申上んと存ぜし間に、追々と屆申故、數多ければお名も忘れ、元より無
筆の私讀む事は盲目なり。狀は紛れ申せ共屆けられし口々は忘れませぬ」と申ける。

にし達—主達の訛
もんじやり—御座り升の訛
ねまり—居られます
小寺—小野寺十内
ゆつて—言ひて
はつこうしもない—詰らない丹波與作にもあり
原—惣右衛門のこと
あと笈—背に負ふ笈
堀井彌五郎—堀部安兵衛が後には彌九郎と出たり
伊勢のお師—大神宮のお祓を國々に配る者
六十六部—六部の事昔は法華經を日本六十六ケ國に納めし故云

ふ　方々へ日々奉公して　ひく―書く

じだらく無―檢東也（俚言集覽）

三度飛脚―毎月三度東海道を往復せしめしより いふ（我衣）

毛を吹て云々―藪をつゝいて蛇を出すと同意の諺

力彌打笑ひ、「世には無筆も多けれ共、己が年迄方々して一文字引事も讀む事もならぬとは、子共に劣つた奉公人。親仁のお歸り成されたら、届けた衆を覺て申せ。ヤア序でに己に云事有。昨日お上りなされし女中、一人は身が母者人、お年よつたは祖母樣、隣の屋主の座敷を借り一兩日は御逗留。裏はひとつの行通ひ、牢人でも武家は武家、常の樣にじだらくに裏越に行まいぞ。お見廻申て來る迄に、用が有らば切戸を叩け」と、文共簞笥に錠おろし、裏へ出れば表より、「頼みませふ」といふ聲す。力彌聞付何事かと、障子の影より窺ふ共、思ひ掛けなく岡平は、「はて再々の頼みましよ。どれからぞふ」と立出る。碁「いや我等は鎌倉の三度飛脚、大星由良之介樣の内衆岡平殿とは此方か。高師直樣の御屋敷から」と、狀取出せば、岡「しい〳〵高い〳〵。成程合點請取た」と懷中にをし入るゝ。飛「いや是々當代の師直樣、大事の御用と御念が入た。何時に屆いたと詳しい請取、欲う御座る」と云ければ、岡「ア、聲高な合點じや。請取せん」とかけ入も、人は見ずとや蜆水、灌本流の墨色や、なまなか常に無筆ぞと、僞はる筆の毛を吹て、疵を求むる類ひかや。飛脚は手形請取て立歸れば、岡平は封じ目切て小隅へより、繰返し讀む長文の、然も細字をつら〳〵と、南あかりの横櫺子影唇を動かせば、無筆と云し空

顯はれ云々―朝ぼらけ宇治の川霧たえ〳〵にの歌によるうぢ〳〵―宇治にかく

言も、顯はれ渡るあじろ木や、うぢ〳〵としてヒ隱し兼、ずん〳〵に引さき茶釜の下に打くべて、門背戸に目を配る躰、力彌とつくと見濟して大きに惱れ、「是は扨色事などの文ならば祕す術も有べきが、いろはも知らぬと無筆に成て、人の心を許させしは底意に工み有奴。殊に飛脚が詞のはづれ、鎌倉よりと請取を書せて取たる次第迄、思へば敵の入たる犬彼奴内通に極つたり。エ、出し拔かれし口惜さよ」と、胸を擦つて立たりしが、「我々が發足も今日明日に近付て、欠落するか道中にてはづすか、何にもせよおめ〳〵と取逃しては無念なり。一刻も油斷はならず、手討にせん」と思案を極め、然あらぬ顏にて力「やい〳〵岡平、火の廻り氣を付よ紙子臭い」と出ければ、力「いや少しも苦しからぬ事。八幡愛宕方々のお洗米の包紙、只今火に上申たり」と、間に合虛もまつかいな、火箸なぶりて居たりけり。力「ムヽさこそ〳〵、ヤ最前の物もふは何方からぞ。又文などは來ぬか」といへば、岡「いや〳〵それは私用。近日御下り近付故道中の嗜み、晒し木綿の切レを買代物が遲いとて、氣の小さい商人め毎日せがみにうせをる。旦那に勤める岡平、三及足らずの銀遣らずに立と思ふか」と、木綿は六尺一寸のがれ、誠しやかにぞ傷りける。力彌始終を聞屆け、「曲者に疑ひなし、下人手討は大事の物と豫て親の物語、

紙子臭い―きなくさい
まつかいな―眞赤と出鱈目とかく
犬―間諜
せがみ―催促

はい―はい

五音―宮商角徵羽なれども爰は上音調

一生の手始め仕損ずまじ」と、力「こりや岡平、用が有爰へ來い」と、にこやかに云ければ、岡「ない」と答へていざり寄る。力「いやずんど爰へ寄れ。遠慮なしに膝元へつゝと來い」といふ五音、岡平も心付脇指脱てからりと捨、丸腰になつて出んとす。力「ヤア其儘脇指さいて居れ。指いて來い」と重ねていへば、岡「何樣共とかく御意は背かじ」と、脇指さいて腰屈め、左勝手に座したりけり。力彌も小膝を立直し、「ヤレ己は最前關東の飛札を讀み、請取迄を書きながら、一文不通の無筆と僞り、主人の眼を晦まし誑かしたる不屆に依て、成敗するぞ」と聲をかけ、抜討にはたと切る。左の肩先肋をかけ脇指迄切付られ、仰向に返すを取て引敷止めを刺んとせし所へ、父由良之介立歸り、門口より聲をかけ、由「ヤレ其奴に止めを刺すな。子細有」と走り入、力彌が脇指取らんとすれば、力「此奴は敵の内通者お退なされ」と引放す。由「ヤレそれをお主は今知つたか。彼奴が作り無筆になり、敵方の内通とはそも〳〵より此由良之介が見付しが、只今討ては敵方にすは顯はれしと用心の氣を付させ、敵に六分の德有て味方に六分の損有。内通と知るからは其儘彼奴を生て置、謀計を打返しに白き物を黑く見せ、赤き物を青く見せ虛を實に振廻へば、彼奴は夫を誠とし、其通りを内通せん、時には敵に裏くはせ、居ながら敵の懷

を知るは、味方に十分の勝十分の德取て、仕廻には此奴を殺しても助けても、損も益もないこと。損益なくば同じくは助くるは慈悲仁の道。我が計略は智より出で、お主が手討は勇の道、是常にいふ智仁勇、弓馬の家の守にも、本尊にも此三ツ、是を守るを忠臣共忠義の武士共名づくるぞ。エ、早まつたり粗忽なり。去ながら若き者道理かな〳〵。我も口には斯くいへど、主君を無罪に殺害させ、其仇をも報じ得ず、主の敵と今日迄も同じ天を戴くは智仁勇も口ばかり、忠臣の道を失はん、口惜さよ」と兩眼に、無念涙を浮ぶれば、力彌も教訓聞につけ、父の涙にもよほされ落涙止め兼にけり。深手の岡平起直り、親子の顏をつく〳〵見て、涙をはら〳〵と流し、岡、眞實敵の内通と思召れん恥かしや。疾に名乘らん〳〵とは存ぜしかど、一日も師直が扶持を受くれば、主從の道にあらずと延引し、此仕宜に罷成ル。拙者が親は前殿樣、御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者、某は寺岡平右衞門、先年我等九歲の時、御領内の鹽燒濱檢地の落度に、親平藏御扶持を放され、流浪の身とは成ながら奉公こそは足輕なれ、忠義の道に違ひはなし。二君には仕へまじ。譜代のお主に今一度と、十余年の渴命は草の根を食み木の實を拾ひ、水を飲で暮せしに、去年殿樣滅亡と聞より親子が此時に、大手の御門を枕にして、鹽冶殿の弓

御持弓―主君の弓を預つて近侍する役

足輕寺岡親子が忠心と、鎚下に名を止め御恩を送り奉らんと、御城本へ走せ參じ籠城願ひ歎きしかど、牢人を集めては謀叛の籠城同前にて、天下のお咎め憚り有、叶ふまじきと追返され、親平藏は七十の老の望みも是迄なり。冥途へ參つて殿樣へ御奉公仕らん、手ぶりのお目見へ云ひ甲斐なし。己は敵師直が首取て、お土產に跡より參れと申置、去年の當月切腹致す。親の遺言お主の仇、人手にかけじと存じ立、緣を求め心を碎き、師直が馬屋奉公に罷出、馬の口取時もがな、只一討と佛神に、祈て時節を窺へ共用心深く引籠り、馬は扨置乘物でも他行とて致さねば、本望遂ん時節もなく、我身の運の拙なさと、思ひながらも世を恨み、天をかこちて一ト冬は、布子の袖の乾く間も、永き夜すがら忍び泣。よし仕損ぜばそれ迄よ。切込んと存ぜし內各方が檢見の爲方々へ夫入るよ我へも其役申付見る事聞事內通し、虛言他言有まじと、熊野の牛王に血判すへ、方々へ出けるが、只目にかくるは此御親子、案內人に知らせじと當春より御奉公、親が念願殿樣の草葉の陰の御忠節、切てもと存る故內通の度毎に、由良之介親子の者腰が拔けて武道を忘れ、遊女に耽り酒宴に長じ、武具も馬具も賣拂ひ、主の敵を討事は思ひも寄らず一門も中違ひといひ遣はすを誠にして、師直が用心怠り、連歌茶の湯花の會、油斷とは

手ぶらー物を持たずに行く手ぶらに同じ

無間―無間地獄　阿鼻も同じ
那由陀劫―千億劫

すくみ―縮まつて動かぬ

此時なり。片時も早く御下り、本望を遂げられよ。サア此事申仕廻ては浮世に思ひ置事なし。早々止めを刺いてたべ。熊野の牛王の起請の罰、現世にはあり〳〵とお手討にあふ現罰未來の無間も疑ひなし。那由陀劫が其間、阿鼻の苦患は受くる共、一言成共主君の忠、親の願を達する事、喜ばしや嬉しやな。去ながら願はくは今少ながらへ、敵討の御供し敵の首を一目見て、一所に腹を切ならば、なんほふ嬉しかるべきぞ。忠義は人に負ね共、誠の時に外るゝは是も起請の罰か」とて、口説歎くも息切れて、哀涙の玉の緒の脈も亂れて見へにけり　親子も不覺の涙にくれ「驚き入たる忠心、今一言の知らせにて大勢本意を遂ぐる事、一騎當千共いひつべし。身柄こそ足輕なれ、お主は冥途の鹽冶殿、我等親子も傍輩なり。主君の忠義に傍輩の禮を云も慮外なり。由良之介が志に此度の一味の武士、我々親子を始として以上四十五人有。假令其場へ出ず共其方親子を差加へ、四十七人忠義の武士と末代に名を留むべし。是を冥途の感狀と親父に語り吹聽あれ。あつたら武士を殘念や」と涙ぐめば嬉しげに、顏差上て一禮を云はんとすれど舌すくみ、聲も出ねば手を合せ、頭を下て頷きし、心の内こそ哀なれ。力彌は手負の顏色見て、「早目の色も變つたり。息の有内師直が、屋形の案内聞置きたし」と云ければ、由實に是は

氣がついたり。有まし如何に」と尋れ共、心計に息切の只ウ〳〵と苦みて、言舌更に分らねば、由良之介碁盤を寄せ、「是此方より碁石を竝べ、圖を造つて尋ぬべし。合ば領き合ぬ時は頭をふり、指を以て引直せ。白石は塀黑は舘と心得よ。爰は東表門一目を十間づもり、竝べし石數十四目、百四十間是皆塀か。ム〳〵〳〵折廻して平長屋、西の裏手は長屋か塀か。扨は是も折廻しの長屋門、櫓は爰に辰巳角玄關は爰の程、侍小屋は南か北か　ム〳〵〳〵三方に取廻し、馬屋は西か武具の藏、扨は爰等ぞ遠侍廣間は是より是迄な。奥の寢所は爰か彼處か。ム〳〵出來た。然れば此間長廊下。此間が泉水築山廣庭ならん。北は明地か」碁盤の目、明いても塞ぐ手負の目、うんと計を最期にて終に墓なく成にけり。由「ヤレ音たてな沙汰するな。町屋住居の氣の毒さ。家主へ聞へては今日か明日かの發足に、大事の前の障碍なり。隣座敷へ聞へても、母女房に包む事、跡は兎もあれ當分遁れ、是又旅宿の重寶」と、親子領き燈を上げ、根太こぢ放し死骸打込み、漸〳〵に元の如くに取繕ひ、燈に溢れし血を押拭ひ、物かげに敷換へ〳〵、「サア能いはとは云ひつ、此上にも包むは兩隣　外より人も來る事有。色悟られな」と呵きて、親子碁盤に差向ひ、力「サア幾つで五ツでか」由「それでも成まいま一ツ置て六ツ」の鐘、謠山

讀侍―中門の傍なる廊の如き所　潛人の詰所也　出來た―でかした

根太―床の下の桁木

物影―目立たぬ所

とは云ひつ―とは云物の五つでか―力彌が五目おいて打たうかと也

寺の春の夕を來て見れば、入相の鐘おぎの聲」庭の切戸を押開けて、由良之助の奥方つか〳〵と立出「申々諸の聲碁石の音、隣座敷へ響きまする。私は夫婦の中、おいとしやお母堂様、遙々お供申せしもそもじ様の腰が拔け、お主の敵は打忘れ、盤上亂舞の遊び事、弓矢の道はすたりしと一門中の腹立。この異見の爲計、國許の老母女房が夕べ登つた、今朝早々内を出て今歸り、親子碁盤で阿房げな、山寺所じや有まい事。過分の所領を給はり、鹽冶判官高貞の執權と敬はれ、三千騎五千騎の諸侍の上に立、國中を膝けしは殿様の御恩ならざるや。其敵を生けて置き御命日の精進も御回向も、寺參りも何しに佛が受給はん。御恩は何で報ぜんとや。ヤイ力彌め忰め、父こそ腰が拔けふずれ、母が腹を貸したぞよ。なぜ父御前に異見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治まらずといふ事を、常にいふたが忘れたか。己が二歳の秋の末有難や殿様の、お膝の上に抱き上げられ、親に劣らぬ人相有、成人して忠切なせ、と力彌とは殿様のおきせなされし烏帽子ぞや。其時に勿體なや、幼い者の習ひとて、殿のお膝を濡せしを却つて殿には御機嫌よく、主「でかした〳〵主の膝を憚らぬ、其心では百萬騎の敵を敵共思ふまい」と、御感の詞を常々にいひ聞せたを忘れはせまい。人でなしの父親は忘れても、此母は寢ても起ても主君

山寺の云々―謠曲三井寺にある唄、下句花ぞ散りけりをもぎの壁とかへたり　雜上―双六、毒亂舞―謠

家に爭ふ云々―父に爭ふ子あれば則ち身不義に陷らず（孝經）　烏帽子―元服して君より名を賜はる　膝を濡す―小便かけしなり

の御恩束の間も忘れはせぬ。庭に飼ひかふ犬迄も、主の仇には噛つくぞや。さいた刀は化粧か伊達か、左程敵が怖いか。いつ迄命が生きたいぞ、臆病者卑怯者。何の因果に腰抜を、子に持たぞ」と聲をあげ、前後不覺に泣き給ふ、恨みの程ぞ道理なる。力彌は俯き返答せず、由良之介色をかへ、「ヤア口上ばるな女め。主の敵を得討いで恥をかいても身共が恥、酒宴遊興長生して樂みも身が樂み、人を雇ふ事でない。威勢強き師直を討損へば首が飛ぶ、討果すれば腹を切、何方へしても死なねばならぬ、損する者は我計。譽られて死なんより、誹られて生きたが德。一門も緣者も、岡目八目傍からはいひ能い物。力彌に向つて惡口我子にはいはれふが、夫にはいはれまい。サアいはれふば云て見よ」と、聲も荒く成所へ、老母は走り出給ひ、母「ヲ、夫には云ひ惡く我子にはいひよいな。然らば其方は妾が子、其方に云ふは此母、去ながら口ではいはぬ。犬同前の畜生は礫に思ひ知らせん」と、恭笥なる石を引掴み搔掴み、目鼻も分ずばり〳〵と投付〳〵、散々に投掛てわつと泣出し、母「なふ奥此方も元は他人なり。あの樣な子を持ちて、其方の心が恥かしい。何もいやるな云ふまいぞ。サア此方へ」と手を引て、涙ながらに入給ふ。流石は武士の嫁姑例なふこそ聞へけれ。力彌は泣いて平伏しが、「御心根も悼はしし。

岡目八目―碁より出たる謎にて本人より傍觀者が却てよく見分ける喩

そと御知らせ有れかし」といへば、卑「いや〳〵一言大事の所、其上母や女房も一味なりといはれては、母方の一門妻の緣者、天下の詮義にかゝらん時、人の心區々にて見苦しき事も有時は屍の上の恥辱なり。百丈の木に登つて一丈の枝より落るとは爰の事、母の恨みも妻のかこちも本望遂れば今の間に晴るゝ事。大事を思ひ立者が小事に拘る事なかれ」と、教訓あれば「御尤〳〵。ヤ忘れたり。鎌倉下向の一味の衆、四十余人より段段飛札到來」と、簞笥を開き取出せば、卑「是は〳〵、扨は鎌倉首尾能便と覺えたり。それ封切れ」と親子の人、手ゝに開き見給へば、文「敵師直油斷の時節到來せり。一時も早く御下り待ち奉り候」と大概同じ文躰なり。卑「サア目出度し〳〵。武具は先へ廻し置く。旅立とても此身がら明日と云ふも手伸なり、笠も草鞋も道での事。此文共を火中して金子を肱に忘るゝな。當地の拂ひ宿代は、書付に相添て簞笥の中に殘し置、心に掛る事もなし。我女房は其方が母、我も老母の顏ばせを暇乞に只一目、ちよつと覗いて立べし」と、手燭差上げ奥座敷の、襖戸そつと明ければ床の前に人伏たり。誰なるらんと能見れば、嫁姑の笛のくさり朱に染て伏し給ふ。力彌「是は」と驚けば由良之介押鎭め、「ア、是でこそ我女房、是こそは我母なれ。命を捨て我々が心に勇を附られしは、尤斯

百丈の木云々―徒然草の人を木に上せて下るゝ時軒長程の高さになりて注意せし條を取れり

大事を思立―之も徒然草をとりたり

笛のくさり―喉ぶえ

こそ有べけれ。主君の敵の師直に母の仇妻の仇、三ツの怨みを一太刀に、晴さんと思ふ門出は嬉しうないか」力「嬉しうござる」典「足が輕い」と進むにも流石恩愛骨肉の、變れる形に氣おくれして、父には包む力彌が涙、父は我子をいさめの笑ひ、泣くも笑ふも武士の道、哀にも又頼母しし。老母むつくと起上り「アヽ嬉しや本望や。其心が知りたさに母は自害を中途にして、今の詞を待たるぞや。如何成智識の勸めより、今の詞を引導にて嫁姑は成佛す。跡の死骸の取置も去方に頼み置く。浮世に氣掛り露塵なし。突込む脇指合圖にして跡見返らず門出あれ。彼方へ參つて殿樣へ御披露申さばお悅さぞお待かね成べし。片時も早く本望遂げ、親子連立ち早ふおじや。くはしい事は冥途にて、先夫までは去ばや」と、がはと突立「あつ」といふ、聲を聞捨て振捨てよ行るに響く夜半の鐘、共に孝行忠孝の武士の道こそ三重遲しき。爰に鎌倉高の武藏守師直が飯島の屋敷構へ、東面に石壁高く、西には大河漲りて、南の方に人海の、舟の往反自在にして、甚だ堅固の要害なり。忠功武勇の鹽冶が郎等、此要害に氣を屈し、今は狙ふ人なしと、聞より師直油斷を生じ、くせの驕奢の歡樂は運の末とぞ聞へける。文和三年天冴て冬も半の雲氷り、霰亂るゝ夜嵐に、口切の夜會を催し、數輩の客人勝手方、果は亂舞の酒

管領―善知識にて人を導く高德の僧

口切云々―茶壺の口あけの茶會

盛に小夜も漸更けにけり。やゝ有て表の門を叩き、「藥師寺二郎左衛門公能、初雪の御茶の湯に伺公致す」と呼はれば、門番立出「はやお振廻は相濟お客も殘らずお歸、奥も漸仕廻にてお夜詰も退中。明日お出」と答へける。藥「いや苦しからず宵より參る筈なれ共、典厩の御所に御用有て遲參せり。師直公の御寢間にてお咄申事も有。今宵は是に一宿致すお心易き藥師寺、ゆめ〳〵氣遣ひなき事。爰明けられよ」と云ければ、番「實も例の藥師寺殿いざ御通り候へ」と、門を開けばつゝと入、藥「番の衆太儀〳〵。最早夜中で有ふが、鹽冶判官が家老腰拔の由良之助、今は町人同前に成たるとは聞たれ共、燒鳥に經緯用心にあきはない。拍子木を絕さず、代り〳〵に寢ずの番、必油斷召さるな。ヤイ身が供の者、明日晝時分に迎に來ひ、朝飯は此方で食ふ。おれが食は焚するな」と、玄關に入ければ廣間は雨戸締る音、屋敷の廻り拍子木の音しん〳〵とぞ三更更渡る。夫柔能剛を制し弱能强を制するとは、張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高貞の家臣大星由良之介、是を守ッて既に一味の勇士四十余騎、露命を亡君に抛ち死を一戰に極めて、獵船に取乘て苦深々と身を隱し、稻村ヶ崎を漕出し、天に滿たる曉の霜も鋭き白波の、岸の岩根に漕寄せたり。嫡子大星力彌苫押退けて舳板の上につゝと出、忍び挑灯差上、

典厩―左右の馬頭の唐名、吉良の子上杉顯正をさす

燒鳥云々―燒鳥にも足に紐をつくると云ふ諺あれば用心すべしとなり

石公―黃石公

清氣六々—清氣なく濁氣充つとなり
老陽—偶數は陰奇數は陽にて一は若陽九は陽なり（眞文雜記）
金剋木云々—五行の内金は木を損ひ火は金を燒かす（瑠璃天狗）
破—星の名にて此星の指せる所は不利なりと也
不破—不破數可衛門
東森—實森助左衛門
立川—横川勘平
千崎—神崎與五郎
河潤—門瀬久太夫
付橋—倉橋傳助
遠松—近松勘六
赤根—赤埼源藏
磯川—磯貝十郎左衛門
花田—縫色

敵の要害遙かに見て、力「時こそ能れあれ御覽ぜ、人鎭つて清氣は沈み、空に朝霧横折れて濁氣上を覆へり。拍子木の調子金にして、數は九ッ老陽金尅木火尅金、自滅の相顯れたり。破軍は辰巳に向ふたり。東の門より南に附て、乘やく」と下知すれば、「心得たり」と片山源太　鎗引提てぞ出にける。竹森喜多八大長刀、奥山孫七、須田五郎、勝田早見、東森七筋合せの鎖にて、板金繋ぎの著込を著し、割筏わりふくべ、家金らんのぬりごてを、揃へてこそはさしもげに、音に聞へし原郷右衛門、大鷲文五かけやの大槌、提げく下立ば、吉田、岡島、不破、前原谷、素鎗横たへて列を揃へて打たりけり。小寺藤内立川甚平、千崎彌五郎、河瀨忠太夫、彼等四人は半弓手挾み、「敵若遠見を付置くか、又は落行溢れ者介勢あらば射留よ」と、由良之介が下知に依て、左右を見定め前後に氣を付しんづくと歩み行く。蘆野、萱谷、千馬、村松、村橋傳次、大太刀佩てぞ續きける。鹽田赤根は長刀構へ、中にも磯川十郎は十文字の鞘外し、遠松甚六片鎌かたげ、杉野、木村、三村の二郎、皆一樣の花田の脚袢、由良之介が智畧にて、八尺計の大竹に弦を掛てぞ持たりける。勇む心は春めきて雪に秀る雪の梅、白梅嫉む白出立、白小袖に黑羽織、金の札に面々の假名實名書付て袖印に付たれば有明月に光あひ、白石黑石打散す亂れ

碁盤に、金銀の砂子を蒔しに三重異らず。扨其次に堀井ノ彌惣七十二歳、一子彌九郎三十歳、親子名にあふ覺の者、ゆらり〳〵と出ければ、矢間の庄司六十八歳、嫡子矢間重太郎廿六歳、音に聞へし親子の武士、「今日を限りの死軍」とにつこと笑ふて出たるに、獅子と虎とが子を連て孤山を巡る如くなり。扨其外吉田、奥山、小寺が嫡子、由良が從弟の大星瀬平、岡野、中村、矢島ノ衞門、平賀ノ左衞門、牧野ノ平次、由良之介は後陣の押へ、忠臣以上四十五騎、義を泰山より重んじ、命を鵝毛と輕んじ、心を金石に比へしは、如何なる天魔破旬成共堪りつべうは無りけり。由良之介下知して曰く、「夜討の大事は奇正の變、敵を明りに誘引出し、味方は暗みを小楯に取れ。女童に手な負せそ。天下を恐るゝ敵討、矢を放つ共塀越すな。火の用心に心を付て、繋ぎ馬を放さすな。折折に合圖の笛吹合せ〳〵、敵に中を割るゝな。敵をさへ討ならば、名乘て勢を引まとへ、合詞を常にして、味方討すな同士討すな。合詞も三度に替へ、乘込む時は山か鐘、軍になつては花か海、退口は笠か鶴。向ふ者は討て捨、逃る敵を追駈て、無益の高名手間取な。取るべき首は只一ツ。サア攻寄せよ」と手組を揃へ、しと〳〵しと、しと〳〵〳〵と詰寄せて、門の南北二手に分り、屋形を睨んでひた〳〵と、塀裏に付たりし心の中こそ

齋藤—堀部彌兵衛
矢間—間喜兵衛と十太郎
義を泰山云々—鴻毛輕於泰山（司馬遷）
波旬—天魔に同じ
山か鐘—合詞にて山といへば鐘と答ふ以下同じ
詰り—壁や戸などの行き詰り

三重　嬉しけれ。「時刻は能ぞすは乗れ」と、千崎彌五郎、須田五郎が肩を踏へて飛上り、塀の腕木に手を掛て、乗入んとせし所に、夜廻中間拍子木打て來りける。人々あつと靜まれ共、壬「ィヤ乗掛つたる一番乗、やはか乗で置べき」と、「ゑいやつ」と打跨ぎ、なんなくひらりと乗込ける。中間驚き「やれ盗人よ」といふ所を彌五郎取て押へ、「討て搖べき奴なれ共案内の爲暫く」と、帶を解て括し上げ控へ柱に縛り附け、壬「我拍子木を打間に門の扉を打放せ」と、塀の内外諜し合せ、拍子木けはしく打ければ、外より小寺河瀨忠太夫、懸矢振上げ、どう〳〵と打つ音に、相番の中間何事やらんと出る所を、彌五郎飛掛つて切て捨、又拍子木を打ければ、外より懸矢どう〳〵〳〵、答する中間ずつぱと切、拍子木の音かち〳〵〳〵、懸矢の音どう〳〵〳〵、中間出ればずつぱと切、三人切て捨る間に力に任せて打懸矢、門の金物打外し、貫抜中よりぽつきと折れ、扉微塵に打碎かれ、大門くはつとぞ開けける。大將由良之介忍びの火差上、内を見廻し山と聲を掛ければ、鐘と答へて一同に、我も〳〵と込入しが、詰り〳〵の戸を締て、内より鎖は固めたり。敲き割れば目を醒し、内より先を取らるべし。左右なふ人べき樣もなき所に兼て期したる謀計、大竹の弓五張、戸口〳〵の敷居鴨居に確かと食せ、各一度に手を揃へ、刀

ゆはしく〳〵はげしく

左右なふ　ひやみれ

を拔て弓の弦ふッつ〳〵と切ければ、大竹に彈れて鴨居を四五寸持上、遣戸妻戸ははらはらと將棊倒しと成にける。力彌透さず緣の上へ駈上り、「鹽冶判官高貞が家臣大星山良之介義國　同じく力彌義道、此外忠義の武士四十五騎、亡君の仇を報ぜん爲攻寄せ候。武藏ノ守殿の御首を給はつて亡君判官が、黃泉の闇を照すべき存念なり」と呼はつて、一文字に切て入レば、「すはや夜討」と混亂して、宵の茶の湯の茶筅髪、寢惚貌に素肌武者、「太刀よ鑓よ」と犇いたり。小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者、相詞合圖の笛吹合せ〳〵、爰に集り彼處に亂れ、馬手に開き弓手につぼみ、祕術を盡せば、由良之介、「余の者に眼なかけそ。只師直を討取れ」と八方に下知をなし、揉立て〳〵三重攻にけり。北隣は仁木幡磨守、南隣は石堂右馬之介、兩屋敷より何事かと、屋の棟に武者を上提灯星の如くなり。軍兵屋根より聲を掛け、「御屋敷騷動の聲、太刀音矢叫び事騷しく候故、狼藉者か盜賊か、但し非常の沙汰候か承り屆よと主人申付らるゝ」と高らかにぞ呼はりける。寄手は元より返答せず、師直方にはうろたへて聞入る者もなく、隙間あらばと迯足も、門々には寄手の兵鎗の穂先を突かけて、出ば突んと待掛たり。屋根の上より口々に、「よし何にもせよ隣屋敷の騷動を、聞捨にせん樣もなし。御加勢申一防仕らん」とぞ呼はり

茶筅髪　髪の先を短く後へ垂れたる髪

仁木石堂　土屋主税本多孫太郎をさす（獻忠武鑑）

卒爾―わけもなき粉塵　形の如く―一と通り　靜まり返る―至りて靜寂

ける。大鷲文五原郷右衛門詞を揃へ、「是は鹽冶判官高貞が家來の者共、主君の仇を報ぜん爲の働き候。天下へ對する狼藉にても候はず、元より兩隣仁木石堂殿へ、何の遺恨候はねば卒爾致さん樣もなし。火の用心は形の如く申付て候へば、是以御用心に及ぬ事只穩便に捨置れ候へ。夫とても是非御加勢と候へば、力なく一矢仕らん」と高聲に呼はつたり。兩家の人々是を聞、「御神妙〳〵弓矢取る身は相互。我人主人持たる身は、尤も斯こそ有べけれ。御用あらば承らん」と靜まり返つて控へける。一時計の戰に、寄手僅か二三人薄手負たる計にて、敵の手負は數知らず、討るゝ者百余人、殘る者は逃隱れ、今は手に立者もなし。されど共大將師直、影も形も見へざれば、由良之助大きに急て、「年月心を碎きしは、彼奴一人を討ん爲。寐間と覺しき所を見よ」と、襖障子を蹴破り〳〵奥へ入て見てあれば、夜著蒲團引さばき枕計ぞ殘りける。曳「ヤア是を見よ、斯る寒夜に此蒲團暖まり醒ざるは、只今脫しに極つたり。近くにあるぞそれ搜せ」と、天井屋根裏緣の下鎗を突込み矢を射入、打返して尋ぬれど共師直は無りけり。外にも人を配り置く、門へ出ん樣もなし。各呆れて立たりしが、由良之介傍を見廻し横手を打て、「あの水門の箱樋こそ一人這ふては通るべし。内より水を流しかけ外へ廻つて窺ひ見よ。内に人の有無

は水の幅に知るべきぞ」「心得たり」と堀井の彌惣、遠松甚六、外へ廻つて待かけしに、内より水をどう〳〵と、汲入〳〵流せども、水口割れて滴りの、跡へ余つて落口は岩に堰るゝ如くなり。由「サア人あるに極つたり鎗を入て捜せや」と、手々に鎗を突込み〳〵狩立れば、堪り兼て泣き叫び、「なふお助け下され」と、這出るは藥師寺なり。人人「はつ」と惘れし所へ大星力彌走り寄り、「何のごくにも立ぬ奴、人手間取らせし憎さも憎し」と振上げて、首打落せば紅の血汐の樋とぞ流れける。由良之介大音上げ、「是程迄仕課せて師直を討漏す、能く天道に捨られたる我々、武運の程こそ口惜けれ。悄々歸つて死んより此所にて腹搔切り、四十五人の怨念惡靈となつて、師直を取殺さんと思ふは如何に」といひければ、力彌を始め原矢間、堀井片山四十余人「何れも左樣に存ず」れ共、大將の詞を相待たり。我々先を仕らん」と、面々肌を押し寛げ、既に斯よと見へし所に、兼て信ずる正八幡愛宕山の御加護にや、馬屋の傍なる小屋の内より煙頻りに渦巻上る。由良之介屹と見て、「南無三寶、あの煙り其儘打捨て外の人に鎭められ、鹽冶郎等四十余人師直を討損じ、狼狽たりといはれては、恥辱の上の名折なり。いざ鎭めん」と「尤」と我も〳〵と小屋の戸に手を掛け、「ゑいやつ」と引放せば、中には薪炭俵、煙

ごくにも立ぬ―役に立ぬ

鎭―消し止められ

浮木に云々―法華經にある句にて千載一遇の喜にいふ

光明寺―鎌倉にあり、泉岳寺をかゝへていふ

しめせ―消せ

りは消てなかりけり。曳「此内は物臭し探せや搜せ」と云ふ聲に、内より炭を攫みかけ、割木を投かけ投つくる。矢間の庄司は炭俵弓手に攫んで投のけ、無二無三に切て入。師直今は叶はじと、躍り出るを重太郎餘すまじと飛掛り、押並べてむずと組み、一締締て跳倒し取て押へ、「高の武藏守師直を、矢間重太郎組留たり」と呼はれば、由良之介を始とし四十五人が聲々に、「浮木に逢る盲龜はこれ三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しや」と、首打落し聲を上、躍り上り飛上り、扇を開き舞もあり、悦びの鬨の聲首眞中に取廻し、「妻を捨て子に別れ、老ひたる親を失ひしも、此首一ッ見ん爲の今日はいか成吉日」と、首を叩いつくひ著つ、一度に「わつ」と嬉し泣き、理り過て哀なり。由良之介は師直が白無垢斷つて首押包み、曳「矢間殿御親子は姿を變て片時も早く、我君の御菩提所光明寺の御墓まで此首を持參あれ。我々は後より」と、あらぬ下郎の首取上げ、同じく師直が白無垢切て押し包み、鎗に結付堀井の彌五郎大驚文五に指荷はせ、曳「師直が本首を御墓所に供ゆれば、今生の本望是迄なり。急まい〳〵急事ない。此屋敷も今迄は師直が屋敷なり。打れし跡は天下の地、踏荒すは恐れぞや。第一は火の用心營程の火もしめせ」と詰り〴〵を靜々と心靜かに巡見し、「敵の一類一家の武者、追手掛くるは目前なり。いら

天下に云々―朝夜の明るくなる如く天下にパッと知れる

ぬ我等が一命、彼等に施し報謝せよ」と、門外に下敷て待合せ見る武勇の程、天下にふるゝしのゝめや、是は高名寺の名は光明寺へと三重急ぎける。夜も明けゆけば谷七郷に隱れなく、在鎌倉の大小名何事やらんと、兜は著れ共鎧は著ず、片手矢はげて走るもあり、馬の腹帶を締兼て、肌脊に乘て駈るもあり。辻々の番太鼓人馬東西に走違へ、上下の騷動斜ならず。師直が嫡子師泰が郎等、光明寺の門前に雲霞の如く取かけ、「門を開きて御首渡せ。異議に及ばゞ寺の門を叩き破り、堂も伽藍も打碎き、片端に坊主首捻切て奪ひ取れ。渡せ〳〵」と犇めきける。寺僧の面々衣の袖に玉襷、「棒よ杖よ」と防げども、制し兼て見へければ、住職の老僧立出、「やあ〳〵斯いふは師泰殿の手勢とや。して侍か下郎か、よも侍にては有まじ。鹽冶殿の家臣四十余人の人々は師直を討取、首を鹽冶の墓に手向本望遂せし上は、鎌倉殿の御咎め恐有とて各身を捨て、只今幕府の御所へ罷出、如何樣共御制法に仰付られ候べし、と御下知を相待申さるゝ。是をこそ弓取の手本とはいふべけれ。和殿原は主君の親を闇々と討せ、其場へおり合討手の一人も切留ず、喧嘩過ての棒ちぎり木、佛場といひ長袖に向つていかつがましき振廻、當寺の法師は恐からず。幕府の御所より御指圖のなき間は、あの生首が髑髏に成迄もいつかな事、此老

弓取―武士

棒ちぎり木―乱妨の高さの樣事件のすみて後嚴ぎ立つる意の謂

いかつがましき—いかめしき
發言云々—斷乎として

人がましし—身分ある人

をし合—皆しと押合とかく

僧が手足をもいで取らば取れ、渡す事は叶はぬ」と、發言放ての給へば、郎「いや論は無益只込入て奪ひ取れ。門押破れ」とわめきける。斯る所に「畠山左京ノ大夫上使なり」と呼はれば、さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す。内より門を明ければ、畠山老僧に對面有、「鹽冶判官が家來共主人の仇を報はん爲、夜前高師直が館へ押寄せ、師直を討取る條武門の面目弓馬の譽といひながら、御所近邊共憚らず鎌倉を騷がす御咎めに依て則仁木石堂に御預け、今日鹽冶が墓の前にて、殘らず切腹せさすべしとの御諚なり。はた又師直が首は一子師泰願ひに任せ、送り遣すべしとの仰なり」と述らるれば、住持御諚を承はり、「首桶しつらひ宜しくまかなひ取納め、師泰殿の御内にて人がましき方、請取り給へ」とありければ、「執權三隅の郡司」と嚴しげには名乘ども、甲斐なき主の首持て、悄々として歸りしは、面目なふこそ見へにけれ。畠「直に用意有べし」とて判官の廟を中にあて、左右に疊敷並べ前に白砂積たるは、溢れし血を淸めん爲の用意なり。後に白幕引廻し白絹の布團を敷き、四十餘口の腹切刀三方に幷べたり。鎌倉中の諸侍「天晴武士の守り神、弓矢取る身のあやかり者」と威儀を正して參詣す。歌人は悼の和歌を陳ね、文者は歎きの韻を搜り、上下萬民老若男女名殘をし合ひ我先にと、光

羊の歩―一歩一歩死に近づく喩

〔麼耶經〕

橋目―監督

明寺に群集して門前市をぞ　三重なしにける。既に時刻も午の刻羊の歩み近付て、檢使の大將名越備前ノ守、光明寺に著給へば、介錯の役人を始めとして帳付横目其外の、役目〳〵の場を請取爰を晴と列座あり。檢用意能ば面々出られよ」と有ければ、左の幕より大星由良之介を先に立、矢間堀井原鄕右衞門廿三人續たり。右の幕より大星力彌第一にて小寺片山東ノ森廿二人打連て、歩み出たる有樣は古今稀成武士の業、譽を取て世の中の濁に染ぬ白小袖、婆婆は夢なる契にて淺黄上下淺くとも、君に三世の忠孝と各〳〵墓に回向して、諸役人に一禮述べ一面に著座して、目と目を屹と見合せ檢使の詞を待たるは、天晴名士の腹切る樣尤斯こそ有べけれ、と知るも知らぬも涙を浮べ、あつと感ずる計なり。名越備前ノ守進み出、「上よりの御諚には此度鹽冶判官が家臣四十余騎、高の師直を討て亡君の仇を報ずる事、前代未聞の忠臣一人當千の働き甚感心覺召し一命助け置れたく思召すといへ共、太平の御代に干戈を動かし、御旗下を騷がすあやまり、國制據なく切腹仰付らるゝ。强將の下には弱兵なし。旁が忠義に依て鹽冶判官、存生の仁德を思召し遣れ、判官が一子竹王丸父が遺跡相違なく、出雲伯耆兩國宛行はるゝとの御諚、冥土へ參つて判官に申傳へ、有難く存奉り早々切腹仕れ」と、高らかに述給へ

上―將軍綱吉をさす

ば、一回「はあつ」と一度に頭を下げ、悦び涙悦び笑ひ、肩衣取て押退け〳〵、由良之介刀頂戴して左の小脇に突立れば、力彌も續て突立たり。次第〳〵に突立突込み引廻し引廻し、時も違はず場も違はず。主君の墓の左右にて、一度に腹を切たりし三世の縁こそ頼もしけれ。頓て殘らず介錯して直に御寺を墓所、萬劫末代萬々年、朽せぬ石に名を殘し、主君の子孫家繁昌、富貴自在の幸ひも　忠と孝との誠の心、天地に叶ひ佛神も目出度守り給ひけり。